

力強い答えが返ってきました。「二人とも学生なので、当面の大きな問題は、赤ちゃんの世話をする時間のやりくりに尽きる」とのことでした。それさえ解決すれば、暇もかける費用もないので後はどうにでもしていくと。家族中で長女を真綿に包むごとく管理した育児とは、ずいぶん考え方が異なることにびっくり。ほんやりとですが、アメリカでの育児は「何となく様子が違うなあ」と感じました。

### アメリカでの出産

今の日本でどうなのかは分かりませんが、20年以上前、私の夫は子どもの産声を分娩室で聞いたという経験の持ち主です。私にその時の体験を聞かせてくれました。妊婦である自分自身では見られない、興味深い現場での話でした。子供が取り上げられるとすぐに、分娩室に準備されたベビーベッドへ運ばれ、その左右両側に立った4人の小児科の医師と看護婦が、頭から足の先まで身体の一つ一つの部位を、声を出しあって確認しあったと言うのです。一時は、分娩室には合計12人の医師団が動いていたそうです。私や赤ちゃんの身体的な異常がないと確認されて初めて、病室へ移されました。翌日、小児科の先生から、子どもの出産状況やいろいろな検査結果などが報告されました。それがどんな種類の検査で、身体の中のどの部分（痛みを感じないとされる足の指の裏）から採血したというようなことまでにわたり、なぜ私に説明しているのか理解できません。日本では、そんな説明をされた事がなかったからです。それは、医療事故に関する病院や医師に対する訴訟を防ぐため、子どもの健康に関することは、「親に知る権利があるのです」と医師から説明を受けました。また一つ、「何か様子がちがう」ことが出て来ました。

2年もおかず、三女の出産で同じ病院へ入院しました。ここで、乳児期の赤ちゃんに、「水を飲ませるか、飲ませないか」問答で、アメリカでの育児は「日本とのそれとは全く様子が違う」というのが、決定的になりました。日本の産院で受けた指導やスポック博士の育児書では、のどの渇きを防ぐため、授乳と授乳の間は少し水を飲ませるのが良いとされていました。次女を出産した入院中も、水を飲ませるようにと使い捨てボトルが支給されました。ところが、三女の場合ではなかなか水を運んで来てくれないので、お願いしてみました。す

ると、「乳児には良くないのに、なぜ授乳の間に水を上げるのか」と逆に聞かれてしまい、なぜだめだと言われたのか分からず、答えられません。

一方的に言われた事を聞くばかりだった立場の私でしたが、アメリカへ来てから3年にもなったのですから、つたない英語力で、少しは問い返すことにしました。2年前には、同じ病院で、偶然にも同じ担当の看護婦さんの口から逆のことを言われてしまったのですから、それこそ「なぜだめなの？」と。すると、「医療的な問題があるのが分かったので、変更になった」という答えが返ってきました。ここで、「私が自分の子どもに水を飲ませたいというのは私個人の問題なのではないですか」と聞いてみると、「病院のポリシーとして絶対に許可できない」と、はっきり断られました。「どんな人でも、病院にいるかぎり病院のポリシー（ルール）に従わなければならない」と、2度目の念を押されてしまいました。ほんのちょっとしたきっかけでしたが、「曖昧さがない」異文化を痛感しました。



アメリカという社会に一歩踏み出すと、その環境は異文化で成り立っています。アメリカ社会でその一員として共存するためには、社会のルールを無視して生きることは不可能です。私の育児に関する基本姿勢の一つは、子ども達の持つ価値観を理解できるよう、自分自身をマネージすることだったと思います。

松本 康子  
まつもと やすこ

1979年、夫の留学で、1歳半の長女を帯同し渡米。その後、アメリカで次女、三女を出産。専業主婦として子育てと教育を担当。子ども達は、親から見てうらやましいバイリンガル・バイカルチャーの大人に育ちました。しかし、「アメリカで日本人の子どもをバイリンガルに育てた」私が、実は、子どもに育てられていたのです。このコラムでは、「海外でともに育った母と子」の悪戦苦闘の姿を紹介させていただきます。皆さんの海外での子育ての参考になりますでしょうか？



アメリカと日本での「出産」と「赤ちゃん育て」の経験から、「お母さん自身の異文化理解が大切だ」という康子さんの主張です。

子どもはアメリカ社会で育っています。その子どもを育てていく為には、「海外でともに育った母と子」になる必要があるでしょう。

しかし、子育て(?)のバトルは、大人になった娘さん達とまだ続いているようです。母親は何歳になっても勉強が続きますね！ 康子さん！